



# 紀平真理子のオランダ通信

第23回

## 有機栽培の Bio Romeo社

### プロフィール

1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペイン語学専攻卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

3月、オランダ北部はEmsにあるBio Romeo社を訪ね、次々と新しい試みを行なっているVan den Dries親子に話を聞いた。

1980年代に慣行農業に取り組んでいた父は90年に有機栽培へ転向する。当時のことをこう振り返る。

「生産制限や補助金システムはいずれ終わりを迎える。スーパーマーケットの台頭で販売価格は下落し、輸入に頼っている形態の農業では先が見えない。今後、環境に配慮して健康に良く、消費者に近い農業が必要だと感じた。とはいえ、有機栽培農家は当時のオランダには5〜6軒しかなかったよ」

そんな時代だからこそ周囲の目は冷やかだったようだ。

「有機栽培の作物を購入する人なんて一部の金持ちだけで需要はないよ」。よく言われたもんだね。でも、人生は選択だ。金持ちでも食べ物にこだわらず、旅行にお金を使う人もいれば、余裕がなくても食べ物に安心できるものを食べたいという人もいる。こればかりは信念で貫いたね」

現在の経営面積は70haになる。作付品目は数多く、小麦や20種類のジャガイモ、ホウレンソウ、カラフルニンジン、タマネギ、チコリ、キャベツ、白キャベツ、パースニップ、

根セロリ、セロリ、カボチャ、ピーツ(赤・黄)、イチゴ、ルバーブ、スイートコーン、アーティチョーク、黒カラスムギ(注:雑草防除のために育て、種子を販売)など多様な作物を生産している。こうして多品目を手がけるのは連作障害の回避に加え、リスク軽減のためだ。有機栽培を始めたときからそうしてきたという。

親子が最も重要だと考えているのは、顧客への直販であり、有機栽培はそのプラスαという位置づけになる。

「お客様の知識不足やスーパーでの安い売値、まだ知られていない品種が多いことに着目したうえで、農場のイベント(オーブンデー、ハーベスティー)ではジャガイモやイチゴをお客様自身が収穫して購入できる機会を設けた。また、都市部に期間限定で店舗を構え、品種の説明や食べ方の提案も実施している」

販売に関しては以前、業者に委託していたが、価格の変動と取引がフェアでないと感じたことから、3年前に近隣の25軒の農家と合弁会社のBio Romeo社を設立するに至る。数量が多くなれば、レストランや病院なども取引しやすくなり、輸送コストの削減にもつながる。これらのメリットを享受している。

この会社組織としては現在、8割

を直接顧客に販売する。中間業者を挟まないことで小売店より3割安く提供できているようだ。販売の残り2割については離乳食加工会社向けで、コールラビやスイートコーン、ホウレンソウ、アーティチョークを供給している。

息子のMikhael氏は最後にこう話した。

「これからの農業は協力がポイントだ。25軒の農家とは毎年ミーティングを行なって生産する作物を話し合う。たとえ作る品目が同じでも、売り先が違ったり、使用目的が違えば、バッティングすることはないので大丈夫だ。実際、設立以来、そうしたことで悩んだことはない。お互いが不足を補って供給量を確保し、また機械も貸し借りしている。政策は変わるものだし、補助金もなくなる。そこに頼ることなく、売り方や品質などを工夫し続ける。挑戦なくして持続可能な農業はあり得ない」



アーティチョークの収穫風景